束芋
たばいも
アーティスト

景色の編集

@同じ場所

去年、両親と妹と一緒に旅行をした。車一台で長野から秋田まで走り、青森からフェリーに乗って北海道に入る。なるべく高速道路を使わず、車からの景色を楽しみ、興味のある対象が目に入ると、時には車を停める気ままな旅だった。

車からの景色は時速60キロ程で前から後ろに流れる。目に留めるものとは〝目に留まりやすいもの〟。それは大きいものや派手なものだと思っていたが、実際は〝個人が興味のあるもの〟が際立って目に飛び込んでくる。同じ場所を車一台のなかから眺めているのだから、見ている景色もそう変わるものではないと思っていたが、その同じ車に乗っている4人がそれぞれ、まったく違う「興味」という観点で一つの景色を編集していた。

父は車を走らせながら、標識や道路状況に気を配る。妹は行き交う人。私は点在する建物。そして母は、路肩に咲く小さな植物だ。

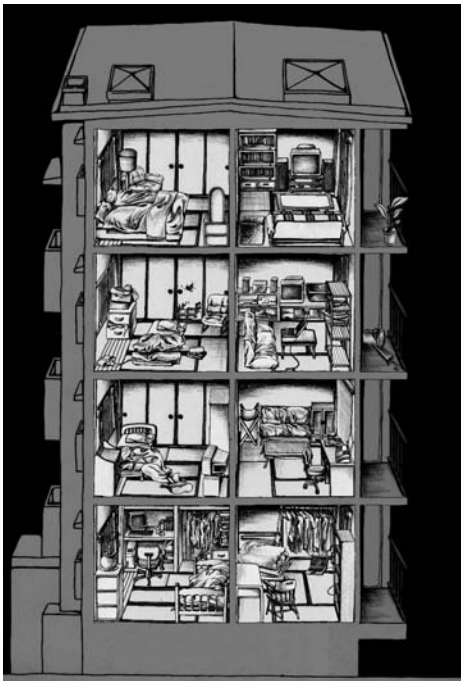
「今の見た?」「え、何?・?」という会話で一旦、自らの編集作業をストップし、他者の興味対象を共有する時間を持つ。

人生も同じで、何にフォーカスするかで見聞きするもの、経験することが変わり、同じ個人がフォーカスの対象を変化させることで、まったく違った人生も有り得る。

そんなことを感じている私は中・高時代、歪んだ正義感を持って世の中を眺めていた。好きな人のことを考えてポーッとするより、嫌いな人をいかに成敗するか。頭のなかは負の要素で占められていて、楽しいことや喜べることを見つけ出す余裕がなかった。非常なパワーをそこに費やしていて、さらに悪いことには、自身が正義だと思い込んでいる。

フォーカスを少しずらし始めたのが、大学受験のころ。芸術系大学を志望し、「もしかしたらやりたいことが見つかるかも」という微かな希望を持つと、負のフォーカスが少しずつぼけ始め、大学生活を謳歌していたころには、もう負の要素はファインダーにも収まらなくなった。目の前の景色から取り上げる要素と、編集によって切り落とす要素は中・高時代と逆転し、私の人生も大逆転した。

人生は意外とシンプルで、常に自分で選んだものが見えている。そして、見えているものを他者と共有したり、自分の見えていないものを他者から分け与えてもらうことで、豊かなものになっていく。今、私が見ている世界が隣の人が見ている世界ではないかもしれないと思うことで、世界の可能性もどんどん広がっていく。



束芋「団地層」(スチル) 2009年
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

横浜美術館開館20周年記念展
束芋　断面の世代
会期：2009年12月11日(金)～2010年3月3日(水)
会場：横浜美術館(神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1)